

於大の死と江戸埋葬を考える

郷土資料館主催のガイド養成講座に参加し、於大の方は高齡を押して伏見まで行ったのはなぜか、また伏見で亡くなったのに何故わざわざ江戸まで運んで埋葬されたのか。このことの意味することについて、当時の時代背景と家康の意とした政権運営について、高木庸太郎先生のお話を聞くことができました。それらのお話といただいた資料から、私なりの整理をしてみました。

はじめに 於大は緒川城に生まれ岡崎の松平広忠に嫁ぎ家康を生みました。その後離縁されますが、再婚した久松利勝との間に生まれた男の子 3 人は、後に家康の弟として松平姓を名乗り、家康を助けます。家康が征夷大將軍となった時に、75 歳の高齡でありながら伏見に赴き天皇と豊臣秀頼に拝謁しています。高齡の母をわざわざ呼び寄せたことは何を意味するのか。そして、亡くなると知恩院での葬儀後にわざわざ江戸まで遺体を運び、傳通院に埋葬されました。このことは何を意味しているのでしょうか。

1 於大の方と秀吉正室高台院

於大の慶長7年の上京について、後世の資料「徳川夫人伝」は「ご遊覧」と書いている。これは名所古跡などご遊覧と親孝行の家康像を語っている。しかし、75歳の高齡の女性を輿に乗せたにしても、相当大変であり高齡の身に生活環境の変化は、体にこたえることを考えれば本当に親孝行だけで上京させたのだろうか？ 事実、7月には病気になる8月に於大は亡くなっている。

1) 於大の一生

享禄 1 (1528) 年 生誕

天文 10 (1541) 年 松平広忠に嫁ぐ

11 (1542) 年 11 月 26 日竹千代(徳川家康)を生む、15 歳

12 (1543) 年 父忠政没

13 (1544) 年 松平家を離縁、家康 3 歳

16 (1547) 年 久松俊勝に嫁ぐ(康元・康俊・貞勝の三男四女)

永禄 3 (1560) 年 桶狭間の戦い直前に家康は於大とその子と面会



慶長 7 (1602) 年 秀吉の正室高台院を京に訪問

参内し豊国神社参詣の後、伏見城で没。

死後、遺体を江戸に運び茶毘に付す。75 歳

2) 於大とおねの出会い

慶長 7 年 5 月 18 日 於大、おねを京の亭に訪問

22 日 於大、参内

23日 於大、豊国者に詣で九十貫文を奉納
この月 家康、水野長勝を伏見城常番とし、奏者番を兼ねさせる
7月23日 朝廷、諸社寺をして於大の病を祈祷させる
8月28日 於大伏見城で没、遺体は江戸で荼毘にふす

3) おねの一生

天文11(1542)年 おね誕生(秀吉の5歳下)
永禄4(1561)年 秀吉と結婚
天正2(1574)年 秀吉長浜に築城、おね長浜の留守を守る
13(1585)年 秀吉従一位関白、おね従三位
16(1588)年 おね従一位、豊臣吉子の名を賜る
慶長3(1598)年 秀吉、伏見城で没
5(1600)年 関ヶ原の戦い、木下家定おねを守る
8(1603)年 高台院の院号を朝廷より賜る
20(1615)年 大坂夏の陣
元和10(1624)年 没

2 関ヶ原の戦い前後における家康の位置

1) 関ヶ原の戦いは何故起きたのか

関ヶ原の戦いは、豊臣と徳川の戦いではなく、秀吉死後の家康対石田の天下の指導権争い。関ヶ原の戦いの東軍の主力は、徳川軍ではなく秀吉子飼いの武将たち。

- ・東国を任せられた家康の指揮下で、伊達征伐の従軍中に石田三成の家康断崖が発せられ、参戦していた武将たちは反石田で合意。そのために東軍には秀吉恩顧の大名が多かった。
- ・その秀吉恩顧の大名たちが主力となって関ヶ原で勝利した。徳川譜代の中核は、息子秀忠の指揮下で中山道の途中にいた。
- ・そのため東軍についた秀吉恩顧の大名たちは、恩賞として西国の国持大名となるものが多く、彼らは豊臣秀頼に引き続き礼を尽くした。

★しかし、結果としてこれらの大名は15年後の豊臣滅亡を黙認した

2) 対大阪城政策と於大の孫娘たちの役割

①久松の於大の孫の縁組

康行の子---福島正則の息子正之、田中吉政の息子、中村定勝の子---島津家久の娘・浅野長政の娘・山内一豊息子忠義の妻
多劫の子---黒田長政の妻、小出吉英の妻、加藤明成の妻

★孫娘の婚姻先は関ヶ原で家康についた秀吉子飼いの武将たち。関ヶ原の前後に婚姻しこれが徳川家康の政権掌握の決定的要因。

3)対大阪城政策の家康の婚姻政策と於大の役割

- ・高台院訪問は、秀吉子飼いの大名たちの信頼の厚い高台院と、それらの大名に多くの孫を嫁がせる於大との対面という意味を持つ。
- ・家康は恐らく婚姻政策推進の立場から、手配をしたと思われる。
- ・於大の参内は、朝廷・公家との関係の深い高台院の口添えもあったかもしれない
- ・面会直後に病気になり、朝廷による諸社寺への病氣平癒の祈祷もされている。
- ・ここには、於大を家康の母として天下に認めさせようとする、家康の意図が働いていたのではないか。

3 関ヶ原の戦いから征夷大將軍就任までの家康

1) 慶長7年(1602)の家康の動き

- ・1月6日叙位、家康従一位、秀頼正二位
この月伊達政宗大阪に至り秀頼に会う、家康これを聞き喜ばず
- ・2月14日家康上京し伏見城に入る
20日朝廷、山科言経を伏見に派遣し、源氏長者に補す内旨を伝えるが、家康は辞す
この月於大上京。子康元・孫定行従う
- ・3月14日家康、大阪城に至り豊臣秀頼の歳首を賀す
- ・5月1日家康参内、諸大名に二条城築城を命令
- ・5月18日於大、おねを京都の亭に訪問
22日於大参内
23日於大豊国社参詣
- ・6月2日家康、東海道の伝馬駄賃の制を定む
11日豊臣秀頼、豊国者社の楼門を改造、家康旧門を竹生島に寄進
- ・7月23日朝廷、諸社寺をして、於大の病を祈祷させる
- ・8月28日於大伏見城で没
- ・10月2日家康伏見を出て江戸に帰る

2)征夷大將軍任官と菩提寺知恩院の造営

慶長8年(1603)2月12日征夷大將軍の御清運等開きなされ、深重の御志願あらせられ、則帝都において知恩院をもって、万代の御菩提所、鎮護国家の大道場とご規定。諸伽藍結構ご造営。また、三河八代のお位牌・御母堂君のお位牌も安置。

- ・普段の鎮護国家・ご武運長久・五穀成就・万民安穩の御祈願....京都は本朝の帝都につき国々の諸人は言うまでもなく、異国人までもが上京見聞候、將軍家お取立ての寺は別格のことと存じ候。
- ・いろいろ言っているが、鎮護国家の中心はやはり京都

3)家康は何故高齡の於大を上京させたのか

於大は京都見物に上京したのではなく、家康の母として(正室のいないためその代理の意味もある)役割を果

たすために伏見城に住むようになったのではないか。

- ・家康の天下取りの構想と女性の役割の中に位置づける必要がある
- ・慶長7年(1602)は、慶長5年(1600)9月15日の関ヶ原の戦いで勝利した家康が、秀吉の死の直前に約束した秀頼成人までの中継ぎ政権から、徳川の長期安定政権実現のために本格的に動き出した時期
- ・そのために慶長7年に最初にしたのは、征夷大將軍任官工作と徳川の京都鎮護の中心二条城築城⇒このなかで、於大は上京した



上:於大の墓

下:伝通院

4 家康はなぜ於大を江戸に祀ったか

これも家康の「天下取り構想」の中で位置づける必要がある。

- ・家康が征夷大將軍の任官にこだわったのは、関東に武家政治の中心を置いた方が安定すると考えたのだろう
- ・そのため新田源氏の末裔だけでなく、鎌倉幕府の正当な後継者として徳川將軍家というものを認識させる必要がある
- ・そのためには、関東に鎌倉に代わる武家政治の新たな都を作る必要がある
- ・家康、征夷大將軍任官工作のころから、「江戸づくり」を構想し任官と直後に全国の大名を動員して「江戸づくり」を始める
- ・その江戸の城下の南側の芝に増上寺を、北側の小石川に傳通院を...

つまりは、すべて徳川政権の中心が江戸であることを認めさせることにあったと言える。